

# 教区だより

2022

6月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌 第387号



新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。これまで「当たり前」にしてきたことが当たり前ではなくなった現実には直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。いま、私たちは早期の事態終息を深く願いながらも、このよくな時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身ををさらし、聖人の教えに出会い直していくことが大切ではないかと思えます。



## 私の現実の 苦悩と迷いが お釈迦さまの出発点

※毎月掲載しております「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

### 目次

- 1 頁 「ことば」
- 2 頁  悲しみが通じあう時 一愚禿悲歎述懐を通して—  
《第14回》 四衢 亮 氏  
よつつじ あきら
- 3 頁 「今、この時に、親鸞聖人に会う」 名和 正真 氏  
なわ しょうしん
- 4 頁 教務所からのお知らせ  
↑マダカラ 出版部会 井上 至  
いのうえ いたる



無戒名字の比丘なれど

末法濁世の世となりて

舍利弗目連にひとしくて

供養恭敬をすすめしむ

(聖典五〇九頁)

戒を持たない名だけの僧であっても、末法濁世においては、釈尊の弟子を代表する舍利弗や目連と同じように、供養し恭敬すべきだと勧められる、という和讃です。これは、親鸞聖人が『教行信証』（化身土巻）に引用される『末法燈明記』において、「大集

経」に末法の世において仏が衆生を救おうとして、名前だけの比丘をほめて世を救う福田とされたという内容。「賢愚経」の末世においては、妻を持ち子どもを抱いているような四人以上の名前だけの僧たちを、舍利弗や目連と同じように礼をもつて敬いなきという記述。さらに仏法のために髪を剃り、袈裟を身に着ける衆生は、戒を持っていなくても涅槃を表す印となるという文などを踏まえての和讃だと思います。

この和讃の前において、第九首では、僧や法師という尊い名を邪な法に陥ったもののように卑しい者の名としている。第十首では、如来の法衣を身に着けながら鬼神を崇めている。第十一首では仏教の威儀の形を示しながら鬼神を尊敬している。第十二首では僧や法師という名が卑しい者の名とされている。ということが繰り返し歎き詠われました。それは仏教を象徴するものが、一様に貶められていることを悲歎されたものです。

威容を誇る壮麗な寺院が建立され、各地には寄進された多くの莊園を持ち、世に君臨する当時の仏教界。そのような権勢を持ちながら、その仏教が蔑まれ侮られている実態を歎かれ、その内実は外道を帰敬するものとなっていると見ておられます。そして、そうした時代にあつては、戒を持たない名前だけの僧こそが、仏教を示し担うのだと詠われているので

す。

親鸞聖人は、世の仏教界から排除弾圧され、法然上人とともに追放されました。そのご自身を「非俗非俗」と表されています。これは親鸞聖人のアマチュア宣言と言ってよいのでしょうか。比叡山などに住まいし、聖者となつて仏位を目指す修行に専一になれるプロの修行者ではなく、「いづれの行もおよびがたき身」と自身を語られます。また様々な往生の道や法文を研究しわきまえるプロの学生でもないと言われます。

しかしだからといって、在俗の身のままに生きるのではなく、時代に翻弄され、仏教の権威からは救われないものとして排除され、日々の生活に苦悩する人々を「われら」とされ、そこに開く本願の救いを確かめる仏教者であり続けた人です。ですから生涯、法衣を身にまとい、アマチュアの仏教者である姿を示されました。

人々を上から見下し世を支配する仏教が、仏教として全く信用されず真実性を失った時代において、「あれでも坊さんか」と眉をひそめられるアマチュアの僧こそが、そこに生きてはたらく仏教を証する者なのだという強い使命感が感じられる和讃です。それを親鸞聖人は、「愚禿釈」と名のり示されました。

「今、この時に、親鸞聖人に遇つ」



「真実は物語をとおして伝わる」

名古屋教区第3組久證寺 名和 正真 なわ しょうしん

「嘘をついたら、地獄で舌を抜かれるよ！」誰でも一度は言われたことがあるのではないのでしょうか。私も幼いころ地獄の絵本を何度も読んでもらい、母に言われた記憶があります。罪を犯した人間が地獄の鬼たちに苦しめられる様が、恐ろしいのだけれども、なぜか不思議と興味をひかれ、「悪い事をしたら苦しい罰を受けるのだ」と心に植え付けられました。そして時を経て仏教を聞かせていただく中で分かっ

たのは、地獄の有様は他でもない罪を犯さずには生きられない、地獄を作りながら生きていく私自身の姿でした。

私は二十代でご縁あって「絵解き法話」を始め、「地獄極楽絵図」「二河白道図」「親鸞聖人絵伝」「蓮如上人絵伝」「釈迦如来絵伝」「聖徳太子絵伝」などの物語をとおして、仏教の教えを学ばせていただきました。「絵解き法話」とは仏教の掛け軸に描かれた物語を分かりやすく解説することで、中世に文字を読めない人たちにも仏教を伝えるために発達した教化方法です。

古来より人間は理解を超えた仏教の真理を物語として伝え、その物語を聞く中で自然に仏教の真理を感じ取ってきたのでしょう。もつと言えば真理のはたらきの方が、私たちを導くために様々な物語となつてくださったようにさえ感じます。

「絵解き法話のコツは何か」と聞かれたことがありました。そのとき、しばらく考えて「私自身が聞くことだと思います」と答えました。絵解きでは「語る人」も「聞く人」も掛け軸を見て、同じ方向を向きます。本堂でご本尊にお参りするときに、皆が同じ方向を向いて仏教の物語を聞いているのです。つまり「語る人」も語りながら「聞く」ことが大切なのです。絵解きをする中で分かったことは、仏教を伝えようとすると伝わらないということ、伝えよ

うとするのではなく私自身が先人から聞いて、体とおして「本当にそうだな」と感動したことをお話しすると、自然に伝わっていくのです。それは、私が伝えているのではなく、私をとおして仏教の教えが勝手に伝わっていくような不思議な感覚です。

今、私の願いは浄土三部経に説かれている「浄土」という物語を深く学んでいきたいということですが、いつの間にか私は「浄土」ということを「昔の人が信じた世界」とか、「現代人には理解できない世界」と諦めてきました。しかし、「浄土」こそ親鸞聖人を目覚めさせた物語であり、親鸞聖人が私に一番伝えたい物語ではないでしょうか。それを深く聞いていきたいという願いが私の中で生まれていることこそが、不可思議な仏のはたらきなのだと思います。

関連書籍の紹介

はじめてふれる親鸞聖人絵伝(御伝鈔・御絵伝)

著者：沙加戸 弘 (東本願寺出版)

『親鸞伝絵』に初めてふれる方に最適な入門書。



## 教務所からのお知らせ

### 《得度》

二〇二二年五月五日付

近江第一組	善念寺	治田 知真
近江第一組	善念寺	治田 知沙
近江第二組	光圓寺	奥村 知子
近江第二組	西琳寺	河邊 文乃
近江第三組	西蓮寺	上寺 璃乃

〔敬称略〕

### 《住職任命》

二〇二二年四月二十八日付

近江第九組	教照寺	那須 文英
近江第十一組	開光寺	小川 幸省
出雲組	大乘寺	蓮岡 徹

〔敬称略〕

### 《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

近江第四組 真光寺前住職 谷 直光

二〇二二年三月二十九日 九十八歳

〔敬称略〕

## 《夏期教師試験検定準備学習会》

について

期間 八月二十日(土)～二十三日(火)

会場 京都教区会館大講堂

科目 真宗学・仏教学・声明作法

法規

対象者 本山で行われる「夏期教師試験

検定」受検希望者

(『真宗』5月号65頁参照)

※今年度はコロナウイルス感染症感染拡大防止のため、期間を四日間(二日一科目、定員を二科目二〇名(声明作法は二〇名)とします。

申込期間は七月一日～十九日までです(先着順)。期間内にFAXもしくは電子メールにてお申し込みください。申込期間前のお申し込みは受け付けませんのでご注意ください。

詳細は今月同封の開催要項をご覧ください。

京都教区ホームページからも開催要項および受講申込書がダウンロードできますのでご利用ください。

## ↑マダカラ

この春、私の二人の子どもが、それぞれ卒業と入学を迎えた。高校生になった長男は、人生で初めての受験を経験した。私も、受験生の親を経験するのは初めてであった。長男にプレッシャーをかけないように配慮しつつ、通知表や偏差値を見て「大丈夫なのか」などと、つい声をかけてしまったように思う。それらの数字は、他者と比較して本人がどの位置にいるのかを示している。数字が良ければ褒め、悪ければ反省を促す。この一年間を振り返ると、私のほうが数字に翻弄されていたと感じている。

次男は総合支援学校の中等部に進学した。脳性麻痺で自由に身体を動かすことはできず、ほぼ寝たきりの状態である。そんな次男に評価する数字をつけることはできないので、他者と比較したことはない。ありのままの本人が基準であり、わずかな成長を見ては家族や先生方と喜んでいる。

私がお世話になっている先生が「『阿弥陀』とは分量とは関係ないという意味である」とおっしゃっていたことを思い出す。何に対しても量ること、比較することに執われている私たちに対して、そういった執着から解放されるよう「南無阿弥陀仏」とはたらきかけてくださっていると受け止めている。

まわりに翻弄されず、それぞれのペースで成長していくことが大切だ。それは私のような大人であれ、同じことなのだ。

そのように子どもたちから教えられたような気がした。

(出版部会 井上 至)

## 編集後記 the editor's note

この四月から娘が保育園に入園した。しかし、娘のクラス内で次々とコロナ陽性者が続出し、登園したと思ったらまた数日間クラス閉鎖になる日々がしばらく続いた。

突然、お迎えの連絡が入ったりクラスがお休みになる事に伴い、予定していたことができなくなったり、「明日はどうなるのか?」と毎日穏やかではない気持ちで過ごしていた。しかし、よく考えたら娘を預けている保育園の職員さんが一番大変なのではないかと思えてきた。自分達もコロナ感染のリスクを伴いながら多数の子供さんの面倒をみて下さっている。そう思うと有難い気持ちが湧いてきたと同時に、いつでも自分の都合ばかり主張する私がいる事に気づいた。

(出版部会 徳田 潤子)

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

『教区だより』 第387号

発行人 日野 隆文(真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075(351)5260 Fax : 075(351)5256

発行日 2022(令和4)年6月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

